

在宅看護への統合医療導入の有用性 —看護計画の検討と動物看護師のかかわり方—

○花田 道子¹⁾ 宮野 のり子²⁾

1) ヤマザキ学園大学 2) 動物病院 NORIKO

演者らは、西洋医学と補完代替医療の両方の良い部分を駆使し、動物にとって最良のチーム医療となりうる統合医療を取り入れてきた。前者は科学的データに基づき局所への治療を目的とする事が多いが、後者には東洋医学などの伝統医学、マッサージのように手を用いる方法、ライフスタイル改善、食事療法、栄養療法、などいろいろな療法が含まれ、からだ全体を診て自然治癒力を促すという点で前者とは異なっている。したがって、両者を併せた統合医療は治療、QOL(Quality of Life)の向上と予防、健康維持の増進に寄与し、一生をケアして「良質な最期の時 QOD(Quality of Dying and Death)を動物、飼い主と共に迎えるための医療でもあるといえる。また、動物が入院した際のストレスを考えると、在宅のほうが早く良くなることも少なくない。さらに飼い主の医療への関心度の増加、動物および飼い主の高齢化に伴い、在宅看護の必要性和重要性も増してきた。そこで、我々の事例からその有用性を報告し、今後の課題を提供したい。

<目的および方法>

飼い主への啓蒙と指導を動物看護師と共にすることによる在宅看護における治療効果と QOL の向上および健康管理（予知・予防）を目的として以下のことを実施した。

1) 飼い主を対象としたセミナーの開催：基礎知識の伝授（簡単な解剖学、病態生理と栄養学）

実技指導（食餌作製・サプリメント指導、シャンプー・マッサージ・温灸の手技指導）

2) 飼い主への個別指導：看護計画（動物の状態把握、飼い主のニーズと技量の把握、病院側の要望と可能性の提示）の立案と実施

<結果>

1) セミナーに出席してもらうことで病気の正しい理解と健康維持の大切さが伝授された。また飼い主同士のコミュニケーションがとられ、同病看護の情報交換の場を提供することによる孤立化防止ないし解消で飼い主の不安軽減がなされ、動物の QOL や病状の改善に好影響がみられた。

2) 看護計画は飼い主と病院側双方に無理のない範囲のものであった。電話による経過観察の情報も多くなり動物の状態の把握は良好になったが、その対応が煩雑となることもあった。

<考察>

在宅看護(Home Nursing)は獣医師、動物看護師、そして飼い主が信頼関係に基づいて協力し合うことで初めて良い結果が得られるものであるため、日頃のインフォームドコンセントにも十分な配慮が必要とされる。まず来院時には西洋医学的観点から動物に対しては的確な一般身体検査と血液、尿、糞便などの検査、必要に応じたレントゲンおよび超音波検査を行い、場合によっては、専門病院または大学等で受診したデータを持参してもらうことも考慮に入れておく。さらに、動物と飼い主の全体像の把握も忘れてはならない。そして飼い主の要望に沿うことである。

一般に往診は医療行為であるため獣医師が行うが、在宅看護となると獣医師の指導のもと、または内容によっては、動物看護師自ら考え飼い主のニーズに合わせた補完代替医療であれば行うことが出来ると思われるため、Co-Worker としてのモチベーションを上げることに貢献できるであろう。また、飼い主参加型在宅看護は飼い主の我が子を何とかしてあげたい気持ちと満足度に答えられることもある。しかし、今後の課題として、飼い主の要望が西洋医学の範疇である場合、動物看護師の看護行為と医療行為の法的な範囲の確立が必要であろうと思われる。

[参考文献]

- ・Orpet, Hilary. Handbook of Veterinary Nursing, 2nd Ed. (2011), Wiley-Blackwell, UK.
- ・花田道子、宮野のり子. 生涯を通して栄養療法を主とした統合医療を用いたボクサー犬の一例：ヤマザキ学園大学雑誌 (2013)；3号：109-118.